経済論叢（京都大学）第176巻第4号，2005年10月

〈追憶文〉

「神聖な恐怖の時間」

——若き日の大野英二先生——

高　橋　哲　雄

I

大野英二先生は2005年9月6日，82歳の生涯を閉じられた。いくつもの大病に耐え，力尽きての，老樹の朽ちるに似た大往生であったと聞く。

私は大野ゼミの第2回（学部1954年）の卒業生で，イギリス近代史を研究分野としてきた。ドイツ中心の先生とは研究対象も異なり，方法意識も必ずしも同じではなく，鬼子とはいわぬまでも，先生の学問のよき同行者，随伴者とはいえない。私にできることは，若き日に遡って先生の面影を，人間的側面に重点をおいて辿ることぐらいであろうか。学問的側面の検証を含む全体像については畏友肥前栄一氏の別稿に俟ちたい。

大野先生について何かを語ろうというとき，誰しもが真っ先に挙げるにちがいないのは，生涯をつうじての絶えざる学問的研鑽であろう。「精励」とは先生のために出来たような言葉である。

34歳という若さで，早くも声名を確立した記念碑的な処女作『ドイツ金融資本成立史論』（1956年）を世に問われてから，大作『ドイツ資本主義論』（1965年），社会史研究の地平を拓く『現代ドイツ社会史研究序説』（1982年）を経て，晩年のナチス・ユダヤ人問題に迫った『ナチズムと「ユダヤ人問題」』（1988年），『ドイツ問題と民族問題』（1994年），『ナチ親衛隊知識人の肖像』（2001年），さらには河上肇研究を含む『比較社会史への道』（2002年）にいたる道筋を一瞥するだけで，難路を踏破された労苦のほどが察せられる。

第2作と第3作の間だけが17年も空いているけれど，その間は社会史パラ

ダイムの模索，資本類型論への試み，河上肇全集の編集，2つの翻訳，と多忙を極められた。数だけをとればとくに業績が多いとはいえないかもしれないが，その密度と質，そこに刻まれた気の遠くなるような営為の蓄積は，とくに晩年の長い闘病生活を思うと胸を打つものがある。

実際，先生の勤勉さと集中力は若いときから群を抜いていた。夏休みが終わるたびに，これだけやったよといってどさりと投げ出されるドイツ語の原書からとったノートの数は私たちをほとんど絶望させた。勉強家揃いのご友人の間でも，先生の勉強振りは評判だった。学部時代，親しくしておられた行沢健三先生のお宅に本を借りに伺ったことがある。気さくな夫人から「お勉強，たいへんでしょう。あの先生はご自分も別格の勉強家やから」と同情されたことを憶えている。その行沢さんがこれまたたいへんな勉強家で，矢継ぎ早に労作を出され，50台半ばで亡くなられてしまわれたのだが。

II

この研究への打ち込みぶりには，今から思うといくつかの理由があった。一つは開拓者としての自覚と自負。先生は研究生活のはじめから常に孤独なパイオニアであり，ある分野を創り出す役割を果たしてこられた。処女作における「金融資本」解明の先駆性にはじまって，「社会史」研究をリードした点でも，ユダヤ人問題の歴史的解明においても，常に未開拓の地に鍬を入れてこられた。すべてが手探りというのは効率が悪いもので，それを埋めるためにはたいへんな膂力が必要である。さまざまな理論や作業仮説を吟味するのにも，持ち前の実証を隙のないものにするためにも，八方に目配りされながら，途方もない努力を積み上げておられた。しかも，先生はそれをいわば「独学」で果たされたのである。先生は世上「旧講座派」に属する代表的学者と位置づけられていて，たしかに山田盛太郎をはじめとする幾人かの人々への敬意と傾倒はあったけれど，安易な凭れ合いはそこにはなかった。そもそも「講座派」理論によって金融資本の構造を論じるなんてことはできない相談なのである。

先生を研究に駆り立てたもう一つの動機は一貫した「志」にある。80歳を前にした『比較社会史への道』の「あとがき」にその所在を示す格調高い文

章がある。学生時代の先生は，満員の学生に埋め尽くされた田辺元の「運命愛」の講義――戦争を運命として受けとめ，それを主体的に愛することを説く――を聴いて，直面する戦争の意味，性質の歴史的具体的な把握のないままに「死生」を語る思想に深い疑問を感じられた。それが先生の「自らのテーマを見出すための孤独な模索」のはじまりであったわけだが，私などが驚嘆するのは，志そのものよりはその持続性である。先生は状況によって所志が減衰することのきわめて少ない一徹の人であり，仙人が霞を食って生きるに近い「精神に生きる」ことのできる人であった。

勉学一途の先生を生んだもう一つの，これは不幸といわざるを得ない事情は，当時の京大経済学部の特異な空気にあった。これについては多くを語る気はないが，政治が学問の世界に入り込み，学部の主流を占める正統派の理論や行動に同調しない人たちが異端視され迫害される事態が一部に起こり，先生もその対象となった。経済学部の汚点の時代で，多感で繊細な先生は深く傷ついた。それを逆にバネにして出来たのが初期の学問的成果，とくに『成立史論』で，八高以来の親友であった佐藤明先生は「あれは大野の屈辱のモニュメントだ」と言い切られる。穏健派の長老静田均先生からは「まあ，いびられた方が学者は育つこともあるから」とヘンな慰め方をされた，とこれはご自身からお聞きした。

III

先生の情熱は学問と同時に，学生に向けられた。先生は教育に燃えておられた。「京大には何の未練もないが，優秀でよく勉強する学生がいるから残っているだけだ」と，私たちには耳の痛いことを，親しい友人たちには語っておられたという。事実，『成立史論』の「序文」には「ゼミナールの学生諸君」への，異例の謝辞がある。

ゼミはきびしかった。まず進度が速かった。たいていの本は3回ぐらいで上げた。著者が何をいいたいか，それがどういう意味を持つかを大きく捉えることが重んじられ，しかしこれが肝要の点となると議論は俄然精細を極める。2時間ではとてもムリで，ゼミは通常5時間に及んだ。出来の悪い報告だと露骨にご機嫌がわるくなり，少しでもあやふやなこと，いい加減なこと

をいうと雷が落ちた。悪口はマルクス並みの辛辣さながら，どこかユーモアがあった。「タカハシ君のいうことはナンセンスだ，ハッタリだ，フィクションだ，文学だ，宗教だよ」といった調子だった（先生が大の文学好きであり，ある意味で宗教的な人であったことと，この言説は矛盾する気もするが，いまは注釈を加えない）。

しかし先生は，齢もそれほど変わらぬのに，怖かった。たしかに先生はせっかちでありかんしゃくもちで，私の大学院での恩師であった静田均先生のように練れた趣はなかったけれど，私たちはそれが怖かったのではない。怖さからいえば静田流の方が上だったかもしれない。「タカハシ君のいうことはこういうことですか」と前置きして，こちらの拙劣な報告をずっと巧みに要約し直すことでその弱点を鮮やかにあぶりだすソクラテス的方法は，口ぶりが穏やかなだけに，こたえた。大野先生の怖さは，逆に私たちを自分と同格におき，対等に渡り合おうとなさって，当然ながら思い通りには行かず，失望したりムキになったりする，そのひたむきな錯覚を裏切るのが怖かったのである。少し格好好くいえば，真理への真摯な使徒である，あの純情な先生を失望させてなるものか，という意識がゼミ生には自然に共有されていたと思う。私は都留重人の『アメリカ留学記』に出てくるタウシッヒ・ゼミにならって，「神聖な恐怖の時間」と，わがゼミを呼んでいた。

そこからは，そうした熱っぽい世界に自分たちも参加したい，学問の世界にのめりこみたいという思いにはあと一歩でしかない。大学院の正式の担当資格もない，無力な助教授のゼミから最初の5年で8人の研究者が生まれたのも，のちには多くの他大学からの進学者や客員研究者が集まったのも，いわば先生の後姿が磁石の働きをしたのであった。

IV

先生には，しかし，ほかにもゆたかな世界があった。行沢，佐藤のお二人のほか，ご近所でもある田中真晴，山口和男，山崎武雄，さらに角山栄，杉原四郎といった方々と親交を結んでおられた。文学部の山田晶先生の名もよく出た。ときには東京から内田義彦，田添京二，住谷一彦といった方が突然

見えることもあったらしい。私たちが先生のお宅にお邪魔しているときにそうした方が姿を現すと，われわれは追い出されるのではなく（「同格」なのだから！），いま取り組んでおられることをレクチャーしていただけた。先生の率直なコメント入りで，こうした「ベスト＆ブライテスト」の学問形成の舞台裏にナマの形で接することができたのだ。何と胸をときめかせる経験だったことか！　しかも，どなたもが教養人的素養をゆたかに持っておられ，話題は学問の周辺から映画，音楽，美術の分野に及ぶことが多かった。そういえば，若き石本正さんがふらりと庭から顔を出されることがよくあり，私たちは後の日本画壇の大家を単に「絵かきさん」と呼びならわしていたのである。

こういうことが30歳そこそこの先生に可能であったのは，それだけの器量が具わっていたからである。守備範囲は広かった。技術や工学，会社の経理にも理解が早いことは工場見学のときによくわかったが，他方では人文学の諸分野にも本領を見ることができた。旧制八高以来の教養主義の伝統に精神的な根をおき，経済学者でも河上肇のような文人肌，哲人肌の人に傾倒し，「経済学部文学科」と揶揄されることもあった出口勇蔵先生の一門の方々とは精神的同族の観があった。

フィクション，ノンフィクションを問わず文学はお好きで，トマス・マンやツヴァイクの話はしょっちゅうだった。若い頃は，とにかくよく映画を観られた。映画館のハシゴもなさった。ゼミの話題も映画が多く，しばしば激論が戦わされた。「天井桟敷の人びと」の封切りのときは，某先輩が先生の熱狂に水をさすように「あれは愛染かつらですよ」と言い出して，激昂した先生との間で「芸術論」で沸騰したことを思い出す。晩年は次第に音楽，とくにピアノ音楽への沈潜が深くなり，驚くべきことに亡くなられる１ヶ月前にベートーベンの「テンペスト」の第一楽章を上げられたという。最晩年のお便りのなかに「眼がわるいので，聴くことが中心になっています」という件りがあり，たぶん奥様の音読される本に耳を傾けていることを指すのだろうけれど，音楽がますます大切になっておられるのだな，とも感じさせられたのである。

先生はヴェーバーの「世界事象について驚嘆する能力」という言葉を座右

の銘のひとつにしておられたようで，『ドイツ資本主義論』の扉にも，それは掲げられている。何事にも驚く好奇の能力が最後までみずみずしい先生の知力と感性を支えていた。先生は，あるいは丸山真男の定義する普遍的教養人——「あらゆることについて何事かを知っており，何事かについてはあらゆることを知っている」——には当てはまらないかもしれない。丸山や，彼に典拠を提供したＪ・Ｓ・ミルはいざ知らず，どれだけの人がそのテストに耐ええようか。しかし，「知っており」，「知っている」を「知ろうとし（する）」と読み替えれば，それはまさに晩年の先生の境地ではなかったかと思う。

V

想いは尽きないが，これまでにも随時触れてきた先生の人柄について，私のごく個人的な思い出と重ね合わせて語ることで，締めくくりとしたい。

若き日の先生はしばしば直情で妥協を嫌われた。二重基準で使い分けを得意とする関西人気質が嫌いだと公言されていた（晩年はちがった）。ご自身はノーブルで卑俗なところが微塵もなかったが，反面，育ちのよい「坊ちゃん」の常として，わがままが抑えられないことがあった。相手によってまったく違う顔をみせることがあった。遠慮のある人，付き合って日の浅い人には，シャイで思いやりにみちた，このうえなく魅力的な先生がいたのに，近い人，自分が引き立てるか引き立てた立場の人には気難しくなり，もろにきつく当たることがあった。ゼミの卒業生でいうと，社会人ＯＢとはいいが，研究者ＯＢとは微妙であり，ときに無体といえるほどきびしかった。学者にはそういう傾向は多少あるものだが（私も例外でない），先生の場合はそれが極端で，そのため最も献身的な門下生と決定的な亀裂が生じるような不幸が起こった。私も，事情はちがうが，10年間破門状態を経験した。親しく接して感化されるという意味の「親炙」という言葉があるが，近すぎると文字通り火傷をするのである。

「きみは関西人でダブルスタンダードだ」と批判されたとき，私が「先生こそ二重基準ですよ」とやり返すといった些事の繰り返しで，出入りが叶わなくなった。先生の潜在的なご不満は私が宇野派に近いという思い込みにあったらしいが，ここでは省く。10年ぶりに「留学の話など聴きたいから遊

びにこないか」と「復縁」のお誘いがあったときは，考え込んだものである。腹をくくって再入門の道を選んだのは，あの「熱い」先生，かたくなで，ときにわがままな，しかし精神の貴族である先生の誘いは，私には断れないと悟ったからである。

それに歴史というものがある。わが家の雑煮は，妻の実家の京風でも，私の広島風でもなく，大野家の名古屋風である（焼いた切餅に青菜をのせ濃い鰹出汁を注いだだけのもの）。大野家の豚の水炊きは貧乏助教授時代の学生用定番として，わが家でも活躍した。あれだけ無分別に本を買いあさっていた先生が，「月一回これが食べられればなア」と洩らされたという貴重な清貧の証言までつけて。

先生から受け継いだ私の口のわるさは，残念にも齢を追って衰え，キミも穏やかになったよ，と人からは言われる。だのに，弟子の「堕落」を尻目に，本家の先生は近年いっそう「過激さ」を加えられた。日本の政治，外交のみじめさを痛嘆し，ブッシュ，ブレアを痛罵するにはじまって，小は南九州の某大学の学長となった，リベラルと信じていた旧友の非民主的な行動への怒りとかなしみが電話口やお手紙で炸裂するのであった。「反対派が徒党を組んで劣悪な人事をしていたからかもしれませんよ」と，うっかり混ぜ返したら「またきみは憶測でものをいう」と怒りをかきたてられ，２回目の破門かとあわてた。齢をとって円くなるようなヤワな先生ではなかった。「成熟」はあっても「円熟」は断固拒否する潔癖さがあった。先生は最後まで「熱い」本物であった。

先生が不帰の人となられて以来，私は理由不明の欠落感に苦しめられてきたが，いまこの小文を書くことで正体がわかってきたように思う。叱ってくれる人がいなくなった寂寥感に耐えねばならぬという，そのことだ。逆にいうと，こんなことをすると叱られるだろうなと意識する存在を持つ幸せを，これまでの私はもっと噛みしめるべきだった。「神聖な恐怖の時間」を，私はいつか忘れてしまっていた。怖い人がいないことは，幾つになってもけっして幸せなことではない。